

あらゆる生き物を生かすような農業でなければ食べ物を育てる人間、食べる人間も生命力を維持する食べ物の恵みにあずかれないのでしよう。汚れ無き土に種を蒔け。無農薬を目指す野菜作りを十数年つづけてえた結論です。

(清水農園)

堅い土、柔らかい土

豊田 一秀

(1)

三月の中旬、あまにがい風が吹くようになると、外遊びの子ども達の肩から力がぬけてくるようだ。そして地面にゆったりと座って遊ぶ姿が多く見られるようになってくる。

丁度そのような頃、この遊びは発明された。靴のドロ落とし用マットの網目から、固まった土を一つ一つ、子ども達はぬき出している。一つの穴から指を入れ、隣りの穴の下から、指をそっと押し上げると、スポッとかたまりがもち上がってくる。そして、子ども達は大事そうに収穫物をコップや升に集めている。スポッとぬけるところや、同じ型のものが集まってくるのがこたえられないといっ



た感じた。子ども達は集めた数を競ったり、所有を主張したりはしない。集中しているが、興奮してはいない静かな緊張がある。

この靴ふきマットの土は、冬の間中踏み固められ続けたものである。霜どけの路、雪どけの路、高下駄のようになってしまった、靴の裏のあの気持ち悪さ。

私は、もっと簡単にそれを作るのでは、と思いい、湿らせた土をマットに入れて、踏み固めた後、同じように



ぬき出してみるが、インスタントものは、その堅さとつやにおいて比べるべくもない。第一、柔らかくてうまくぬき出せない。やはり、時をかけて少しずつ重ねられた天然ものでないとダメなのだ。

子ども達は温かな土に座って、冬の土をぬき出している。

大切な収穫物は、共有の宝物として秘密のU字溝に貯えられていた。

(2)

五月の初旬、子ども達の半袖が青葉に映えてまぶしい。K君は、木陰に足を大きく開いて腰を下ろす。そして、両手を同じように動かして腰を下ろす。そして、両手を同じように動かして、白く乾いた土を自分の近くに集め、小さな山を作っている。両足の間の地面には、手の動いた跡がハート型となつて残っている。

K君は、できた小山を両手ではさみ取るようにして、陽に暖められた柔らかな土を手にする。そして、合わされた手を少しずつ開いては、手の間から土を落とす。柔らかな土は砂時計のように、糸を引いて元の山に落ちている。K君は、手になくなる度に、何度もそれをくり返している。合わされた手は、はたから見ると拝んでいるようにも見える。



K君の世界をこわしてはいけない、と思いつつも、私は強く心を動かされ、K君の横で同じように、両手で砂時計を作ってみる。両手の間から、サラサラと流れおちる柔らかい土。両手の中で土が減っていく感じが、何とも言えず頼りなく、また心地よい。この快感は排泄の心地よさに似ているなと、フッと考える。

K君は、両手の、特に小指辺りの開き具合を加減して、砂の落ちる量、速さを調節している。私は、K君の落とすサラサラ土を自分の両手で受けてみる。K君の土が私の両手にたまったので、今度は、私がK君の手の上に土を流し落とす。K君は、両手でそれを受けてくれる。こうして、土は流れ落ちつつ、二人の間を循環する。

K君は三歳になるが、まだ言葉は出ない。しかし、柔らかな土のおかげで、よい会話のできたひと時であった。

カチカチの土、サラサラの土、ベトベトの土、ホクホクの土、土は様々にその態を変える。子ども達は、その時々々の土の態に応えつつ、それぞれの土を遊びこなしていく。

(1)も(2)も豊かな土に囲まれた兵庫県社町の小さな保育園でのひとコマである。豊かな土は自然の恵みかもしれないが、園生活で与えられるゆったりとした時は、自然の恵みではない。それは保育者の配慮によって保障されるものである。子ども一人ひとりの心の「育ち時計」に合った時を尊重したいものである。

時は五月、子ども達をたっぷり、そしてゆったりと外で遊ばせたい。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)